# 佐藤春夫と一九一〇年代（三）

## ――ニーチェ・鷗外・大石誠之助との関わりをめぐって――

石崎　等

Ⅰ　GO兄（五点沖野岩三郎）宛の書簡スタイル
Ⅱ　長短一九の断章（うち短歌一首のものを含む）
Ⅲ　五つからなる断章（辞世吟ともいえる四首の短歌が末尾に置かれている）

量的には、Ⅱ、Ⅰ、Ⅲの順である。Ⅰが沖野岩三郎宛に書き送られた獄中で聖書を改めて読んだ感想、Ⅲは判決直後の辞世的感懐、Ⅱは獄中生活の記録と自伝抄で、最後に宗教関係者から信仰を勧められたこと、「自分が半月ばかり前に、キリストがゲツセマネの園で祈りをせられた事」云々とあることから、Ⅰとリンクしており、それを受けて書かれていることが分かる。そこには〈苦痛〉のない〈悟り〉の心情告白、生への〈執着〉を超脱した〈小さい〉人間としての真率な自己認識が表明されている。そして「あゝ自分と言ふものは煩悶するにも足らぬほど小さなものであるのだらうか。」という、どちらかといえば平凡な言葉が大石の最後のメッセージであった。

しかし私の関心はそうした部分にはない。大沢正道が言うように〈大石は、木下尚江や石川三四郎らと並んで、「神」や「宗教」

### 九、獄の裡、獄の外――大石誠之助と佐藤春夫――

二人の〈大石〉は語呂合わせめくが、ここで、「大逆事件」の被告のうち、佐藤春夫が『愚者の死』で悼んだ大石誠之助を召喚し〈死〉に直面した人間心理についてもう少し詳しくみていくことにしよう。遺書として残された『獄中にて聖書を読んだ感想』[18]には重要なことが語られている。彼なりの自己の〈死〉に立ち向かっている様子が読み取れるだけでなく、本稿のテーマと深い関わりが認められるからである。

大石誠之助の『獄中にて聖書を読んだ感想』は、一九一一（明治四四）年一月六日の日付のもの・処刑前日の一月二三日の日付のもの・死刑判決言渡しの日の朝の一月一八日の日付のものの三つの部分からなっている。神崎清の「解説」によれば「遺品を整理した監獄関係者の誰かが、散乱をふせぐために、大体の見当でとじあわせた」[19]らしいが、内容から配列されている可能性も否定できない。

を己れの精神活動の糧として積極的に取り込むことのできた社会主義者〉であり、その〈社会主義は政治革命、社会革命の運動であると同時に、人間の精神やライフ・スタイルの変革を迫る文化革命の運動なのであって、この視点からみる時、ここで提示された大石の構想は貴重であり、先駆的である。〉（秋山清との共著『幸徳・大杉・石川』〈一九七一・一一、北日本出版社〉）という評価、つまり政治革命・社会革命だけでなく、新宮ならびにその周辺地域に根強かった差別問題や料理を始めとする幅広い文化活動までを包摂した理想主義的社会主義者としての大石誠之助の重要性である。同時に、大石は洒脱な情歌（ざれ歌）の作者であり、鶯亭金升から〈升〉の一字を貰い「祿亭永升」を名乗る風流人でもあった。こうした多面体ともいえる個性と思想をもった魅力的な人間をどのように位置づけるべきか。

大石誠之助が理想主義的社会主義者として活躍したのは約七年ほどである。その間、二百本に及ぶ論文やエッセイ・小品を新宮の『熊野新報』『牟婁新報』『浜ゆふ』『サンセット』、東京の『平民新聞』『世界婦人』、『京都日出新聞』、『熊本評論』、前橋の『東北評論』などに書き、さらにはクロポトキンやバシンスキーの翻訳の秘密出版を手がけている。当時の社会主義者の間で、新宮という地方都市にありながらそのネットワークの広さと危険を冒しての執筆活動は抜群であった。

しかし最も重要なのは、理想主義的社会主義者としての大石がまじめなトリックスターであったということであろう。彼はひとつの現実のみに執着することの不毛さを笑い、複数の現実をいともたやすく往還して人々を驚かせる存在であり、〈天皇＝現人神〉に挑戦的な態度を取り、偽善や迷信を黙許できない社会主義者であった。大石の思想はしばしば法的秩序の外へと逸脱していったが、熊野川での舟遊びの折の密談謀議や革命的決起をめぐる放談などは、ありえない演劇的な冗談としか言えないものであった。その最大級の挑発が不幸にも「大逆事件」を招いてしまったわけである。沖野岩三郎の依頼を受けて〝紀州組〟の弁護を引き受け、高木顕明と崎久保誓一の弁護を担当した平出修は『大逆事件意見書』の「後に書す」で〈大石誠之助に至りては寔に之れ一場の悪夢、思ふに、事の成行きが意外又意外、彼自らも数奇なる運命に、驚きつつあつたのであらう。（……）大石には証拠上千百の愁訴も之を覆すべからざるものあり、……〉（『定本平出修集』〈一九六五・六、春秋社〉三四二頁）と矛盾するような微妙な表現をせざるを得なかった。これはレトリカル以上に大石のトリックスター的な性格を把握できていなかったことを意味する。

医者である大石は、社会の病理に鋭い診断を下したわけだが、限られた生の中で記憶の貯蔵庫のすべてを開くことはできなかった。「遺書」には大石の思想の潜勢力のすべてが明らかにされているわけではなく、階級差別の問題や料理などの文化活動についての言及はない。死を前にしてそれどころではなかったと解釈するしかない。しかし一個の統一した自己像を示しつつ、当時の急進的革命思想が直面していた本質的な問題とキリスト教との関係については可能な限りの解答を用意しようとしていたと思われる。なぜなら山路愛山の言葉を借りれば、大石もまたかつては〈新信仰を告白して天下と戦ふべく決心したる青年〉のひとりであり、彼の理想主義的社会主義の基盤にはキリスト教があったから

である。

Ⅰで大石は、特に『マタイ伝』の第二六章（三六―四六）におけるゲッセマネの園で祈祷するイエスの姿に注目し、死を前にして憂愁と苦悶と懊悩に襲われているイエスに共感し、冤罪の犠牲者イエスを我々と同様な血の通っていた存在とみようとした。またⅡでは、裁判および事件の本質を〝うそから出たまこと〟というアイロニカルな俚諺で表現し、「自分のこれまで行つた事、言つた事、書いた事が、そのうちにある欠点と矛盾と虚偽と誇張とを、あるがまゝに公平に見る人によつて、一般人生批評の資料となされ得る事を望む」と、ある意味では自分をさらけ出す姿勢を示し、「誤解に生き誤解に死ぬ」人生だったが、〈寂しき悟り〉という一言が自分の今の境地であると表明している。大石は〝うそから出たまこと〟として一連の事件の推移と裁判の実態を把捉していたが、それは現実の世界にあまりに空想的で思いがけないものの出現をアイロニカルに見てしまったことに他ならない。刑徒の中でそうした観点から「大逆事件」を見ていたのは大石唯一人であった。

大石の処刑直前のアイロニーに満ちた自己客観化は、自己ならびに自己の過去――〈自分のこれまで行つた事、言つた事、書いた事〉――との切断を意味した。それは過去の自己を否定することではなく、過去の自己を肯定した上での〈断絶〉であった。トリックスターとしての性格を自覚していたがゆえに、それを率直に〈寂しき悟り〉と総括してみたのである。

さらにⅢにおいては次のように書き記した。

自分はトルストイがロシアの国教や裁判権を否認しながら、尚ほ無抵抗主義を執つて居た心持も漸くわかつた。軍医総監にして文藝の人なる森鷗外が「あそび」主義にも同情を寄せる事が出来る。彼等は人生の海へ飛込んでその中を泳ぐと言ふのではなく、無難なき〔る〕範囲に於て出来るだけ海に近より、而かも尚ほ現在生活の陸地に安住しようと言ふのだ。これは殆ど波打際で遊ぶ子供が此処までしか波は寄せて来ないと見込みをつけて、或処へ腰を据えてるやうなものだ。然し、波と言ふものは必ずしも其処まで打上るときまつたものではない。若し非常な大浪が逆捲いて来たならば、彼等も進んで海を泳ぐの人とならねばなるまい。それとも海に憧憬るゝのみで山の中へ隠れてしまふか。さうすれば寧ろ溺れるといふ危険はない。

つまり、人間の立場などいふものは、或点までは自らきめて置いても、時と場合によつては、意外の出来事に逢つて意外の辺にさらはれてしまふものだ。さうして我々はその新しい立場に於ても、之に適応する心持になり得るものだ。何事もさう心配したものではない（『獄中にて聖書を読んだ感想』、傍点引用者）[20]。

ここにも鷗外への強い関心がある。詳細は後述するが、〈「あそび」主義〉とは短篇『あそび』に表明された鷗外の創作態度や人生観である。多くの刑徒が程度の差こそあれ、獄中にありながら文芸への関心を強く抱いていたことにもっと注意をこらす必要がある[21]。彼らは、すべての手段をもぎ取られて、獄舎に幽閉され、すべてから孤立したとき、〈文学〉を通して時代の動きを読み取

ろうとしただけでなく、〈文学〉こそが人間の根源的な多くのことを成し遂げているがゆえにそこに救いを求めようとしたのである。自分たちの自由を奪い、圧迫と不公正が横行し時代が病んでいるならば、一歩身を引くことであっても現実世界を表象した〈文学〉の健康さにすがろうというわけだ。

鷗外の小説はあまりにも整序されすぎている。聡明で一点非の打ち所のない理知の小説世界のようにみえる。しかしある種の小説には、根柢にアレゴリーの閃きがあり、鷗外流のアイロニーが潜んでいる。批判者はそこを見落としがちである。むろん〈Resignation〉や〈傍観者〉などとも置き換えられる鷗外固有の姿勢と無関係ではない。多くの人は揶揄やアイロニーという諷刺精神の拠って立つところを正確には見抜けなかったし、そうした曖昧な小説の作られ方を文壇人は働き過ぎる理知のせいにして評価しようとはしなかった。ある者からは酷評に近い扱いを受けた。

鷗外のこの頃の小説が、獄中の刑徒たちから権威として注目されていたこと、そして文壇批評家とは異質の人たちの賛同を得ていたことをどう考えたらいいのだろうか。時代を経ると、小説などどのように書いてもいいと考えていた鷗外のほうが、時代の中で輝きを増してみえるという逆説といってよいだろうか。『沈黙の塔』も〈五條秀麿もの〉も、誰も書き得なかった作品である。それらは倫理的責務に裏打ちされている。稲垣達郎は一九一〇年代の文業に寄り添い、それをつぶさにたどり〈何らかの乗越えの道〉（『「蛙の丸呑」など』[22]）を模索する鷗外の姿を検証した。また竹盛天雄は〈いわば目つぶしのような戦術〉〈自己解説の隠れ蓑〉を読み取ろうとした（『鷗外　その紋様』「終わりに　Ⅱ鷗外の位置」[23]）。

Ⓐ第一流でもなんでも、小説家である以上は、政府は厄介ものだと思つてゐるのだから、死んでくれゝば喜ぶのである。（『ル・パルナス・アンビユラン』）

Ⓑ木村は日出新聞の三面で、度々悪口を書かれてゐる。いつでも「木村先生一派の風俗壊乱」といふ詞が使つてある。中にも西洋の誰やらの脚本を或劇場で興行するのに、木村の訳本を使つた時に此お極りの悪口が書いてあつた。それがどんな脚本かと云ふと、censure〔注・出版物・映画などの検閲の意。フランス語〕の可笑しい程厳しいキインやベルリンで、書籍としての発行を許してゐるばかりではない。舞台での興行を平気でさせてゐる、頗る甘い脚本であつた。（『あそび』）

Ⓒ藝術も学問も、パアシイ族の因習の目からは、危険に見える筈である。（『沈黙の塔』）

Ⓓパアシイ族の目で見られると、今日の世界中の文藝は、少し価値を見とめられてゐる限は、平凡極まるものでない限は、一つとして危険でないものはない。

それはその筈である。

藝術の認める価値は、因襲を破る処にある。因襲の圏内にうろついてゐる作は凡作である。因襲の目で藝術を見れば、あらゆる藝術が危険に見える。（『沈黙の塔』）

実に明快な断言である。これらに『フアスチエス（対話）』を

加えたいが、部分的な引用では意味をなさず引くことはかなわない。この対話は今村恭太郎の『官憲と文芸』（明治四三年七月二八日『太陽』）への批判として書かれたものである。標題《Fasces》は、古代ローマ執政官カンサル consul が持っていた束桿のことで、役人の権威標章である。この小説で鷗外はハインリッヒ・ハイネを引き合いに出し、検閲問題をめぐる〈文士〉と〈役人〉の事なかれ主義、欺瞞、偽善性を批判している。〈文士〉は最後に登場する〈引き回しの人〉＝自らの daemon から〈へろへろ文士〉とその弱腰を批判されて訣別を宣告され、また基準のない検閲を行う役人は、「威力は正義の行はれるために与へてあるのだぞ。ちと学問や芸術を尊敬しろ。」と罵倒される。前者では文学作品を書くことの倫理性が問われ、後者では社会正義のための正しい判断が求められている。『ル・パルナス・アンビユラン』と同様に文化への野蛮な暴力批判に対する寓意がこめられている。

ところで『あそび』は、『食堂』などと同様に〈官吏〉にして〈文学者〉の木村が主人公である。「木村」は「森」を意識したネーミングで鷗外の〈分身〉であろう。この短篇にはふたつのポイントがある。ひとつは文芸欄などでいわれなき批判がなされていることへの批判、もうひとつは〈官吏〉としての「秩序的生活」と「風俗壊乱」ではないかと疑われている「芸術的生活」との矛盾の否定である。つまり、いわれなき文壇批評への自己防衛・自己弁護の姿勢が示され、漱石とともに余裕のある文芸を〈あそびの文芸〉と見なされ軽視されていることへの抗議であった。

厄介なことに、引用文Ⓑにある「日出新聞」は『東京朝日新聞』を暗に指している。鷗外の新聞ジャーナリズム嫌いは有名だが、自然主義陣営から同じ〈あそびの文学者〉と目された漱石が〈朝日文芸欄〉の主宰者であったからだ。その点をもう少し詳しく見ていくことにしよう。

## 一〇、鷗外の『あそび』

鷗外は新聞の文芸欄で自分とは違う価値評価基準によって批評が行われていることに不公平感を懐いていた。これは鷗外でなくとも一般論として通用するから格別なことではない。しかし自分の作品が誤解されて引き合いに出されることには我慢がならなかった。「見当違に罵倒したりなんかせずに置いてくれれば好い」というのが反論の根拠であった。しかし自ら署名して発表するかぎり、〈見当違い〉ではなくまた〈罵倒〉しないかぎりの批評の存在意義は認めていた。

漱石は〈朝日文芸欄〉の編集責任の立場から『鑑賞の統一と独立』（一九一〇・七・二一）を書いて、「各自の舌は他の奪ひがたき独立した感覚を各自に鳴らす自由を有つてゐる」ことと「各自は遂に各自勝手に終るべきもの」との間の矛盾に連絡をつけることはできないか、〈趣味の統一〉感や調和を構築することはできないかと論じた。『好悪と優劣』（一九一〇・七・三一、八・一）では「文芸界に在つて同じ空気を吸ひながら、同じ飯を食ひながら、同じ文明と社会に住みながら、友人と他人とに論なく、人は皆石片の如く何等精神的に交渉なく只ごろ〳〵してゐるといふ不合理な結論」を回避する方策はないかと思案し「文芸の成立に必

要なる相互の同情」が不在であっていいのかと論じた。そして「好悪を以て満足の出来ぬ程主観が強烈に働くとき、これを客観化して優劣とし、其処に趣味の統一を要求して始めて落ち付く」と提唱した。こうした言説は鷗外との関係で見ていくとなかなか微妙である。なぜなら、鷗外は七月二一日の「日記」に〈朝日新聞に夏目漱石時文評を草しはじむ。〉と記して、『鑑賞の統一と独立』以下の評論に注目していたと推測されるからだ。

『あそび』は一九一〇（明治四三）年八月一日発行の『三田文学』に発表された。七月二〇日の「日記」には〈あそびを校し畢る。〉とあり、翌二一日の条に〈あそびを俳書堂に渡す。〉とあることから、『鑑賞の統一と独立』に眼を通していたかどうかが問題となる。一方、漱石が『好悪と優劣』を書いたとき『あそび』を読んで書かれたのかどうかという点が問題になる。しかし漱石の二つの評論は論旨に一貫性がある。もしかりに視野に入っていたら、『東京朝日新聞』の三面が話題にされ、〈文芸欄〉のありかたが問われ、その責任の一端を担っていた森田草平の評論が揶揄されているかぎり、鷗外の『あそび』に対する間接的な応答であったとみなしてよいだろう。

鷗外の〈あそび〉の精神はいわばディレッタンティズムである。鷗外に不満を懐いた草平は芸術家とディレッタンティズムの間に批判のくさびを打ち込もうとした。八月一一日、〈朝日文芸欄〉に発表された『「あそび」について』がそれである。論拠とされたのは〈境遇〉への文学的固執であり、『煤煙』から『輪廻』まで一貫した草平文学のテーマにほかならなかった。つまり草平は主人公が置かれた〈境遇〉との葛藤・克服（そして出来得れば精神的な安定を得る）という行為遂行的な言語の使用を小説の生命と考えた。だから巨匠鷗外に敬意を抱きつつも〈あそび〉の精神に基づくその小説観には不満を募らざるを得なかった。〈あそび〉の文学はたとえ比喩的表現だとしてもディレッタンティズムの自己弁明であり、それは真摯な読者の期待を拒絶するからである。この段階で草平はどこまでも鷗外と平行線をたどる。〈朝日文芸欄〉に『木精』の寄稿を仰ぎ、その原稿料として〈雛道具の駕籠〉を贈られるという関係に始まり、〈あそび〉論争、「危険なる洋書」のどす黒いキャンペーンを経て、漱石の鷗外宛の書簡が発せられるまで、〈朝日文芸欄〉の運営は何かと物議を醸したのである。それも時代の必然であったといえなくもない。

『あそび』が書かれて五ヵ月後、〈修善寺の大患〉を克服して帰京、長与胃腸病院に再入院して新年を迎えた漱石は鷗外に書簡を送り、見舞いの礼と〈参上の上親しく御高説も可承の処未だ在院中にて諸事不如意〉（一九一一・一・一〈推定〉）と述べ、『門』を森田草平に持参させ届けさせた。実質上〈あそび〉論争は草平のほうが詫びを入れて終結していたのだが、改めて〈朝日文芸欄〉主宰者としての礼をとったのであろう。もうひとつの見方も考えられる。それは「大逆事件」裁判が進行しつつあった時代に生きる文学者のあり方についての問いの構造が含意されていたことである。いずれにしても、ここに鷗外漱石二家の接近遭遇があり、その媒介者として草平があったことを確認すれば足りるだろう。

そうしたことはさておき、〈あらゆる為事に対する「遊び」の心持〉を懐いている木村を通して鷗外が考えていた創作態度とは一体どのようなものであったか。

此男は著作するときも、子供が好きな遊びをするやうな心持になつてゐる。それは苦しい処がないといふ意味ではない。どんなsportをしたつて、障礙を凌ぐことはある。又藝術が笑談でないことを知らないのでもない。自分が手に持つてゐる道具も、真の鉅匠大家の手に渡れば、世界を動かす作品をも造り出すものだとは自覚してゐる。自覚してゐながら、遊びの心持になつてゐるのである。（『あそび』）

要するに木村は、苦しみや障礙を抱くことなく子供の遊びのような気持ちで創作している。それは本能ではなく意識したものであり、作りたいときに作るという〈遊びの心持〉によって貫かれている、というものであった。自然主義者を始めとする多くの文学者が、人生の不満と憂悶とをストレートに表現しがちであったのに対して、鷗外は著作活動と実生活のバランスをとる〈あそび〉のライフ・スタイルを木村に仮託しようとしたと思われる。しかし『あそび』における鷗外のことばは何かを生起させるために機能していない。皮肉な反語的精神がその邪魔をする。木村は鷗外の傀儡として無限の忍耐に生きる存在である。

鷗外はなぜ『あそび』のような誤解されやすい小説を書いたのだろうか。〈あそび〉だからといって作者は作品に対する責任を放棄しようとしているわけではない。検閲の力が容赦しないことは『キタ・セクスアリス』において検証済みであった。そうしたことを了解した上で自分の考えを小説という表現手段で訴えることには戦略を必要とした。諷刺と皮肉、寓意は文壇人の中で最も巧みであった。〈あそび〉は〈Resignation〉や〈傍観者〉という人生観の表明に近い。諷刺と皮肉や寓意が攻めの表現だとしたら、〈あそび〉はどちらかといえば後ろ向きの自己弁明に近いといえるだろう。竹盛天雄は鷗外の一連の小説を〈いわば目つぶしのような戦略〉と巧みな比喩を用いて表現した。文壇人や検閲者や読者の目をくらます戦術は責任回避といえるだろうか。そうではなく、〈あそび〉もまた鷗外の文壇人やジャーナリズムや検閲者や読者の目を意識した対処のしかたであったと理解するしかないだろう。書く主体としての権威によって社会を煽動すること、つまりプロパガンダを否定する鷗外は、書く主体としての権威を保持しようとした。それが『あそび』のディレッタンティズムではなかったか。

寓意的表現世界の極北ともいえる『沈黙の塔』が生田長江の翻訳書『ツァラトゥストラ』の序文として掲載を許可されたことはすでに触れた。また草平と親交のあった長江が「夏目漱石氏と森鷗外氏」（一九一〇・一『新潮』）で〈ツァラトゥストラの詩人は、真正の男子の求むるものを、危険と遊戯とであるとした。危険なる遊戯は常に陽気なものでない。鷗外氏の『あそび』にも、陰鬱の気を斥けないものならば、餘程同感のし易いものになつて来る。〉と書いたことにも言及した。

大石の寓意に満ちた「遺書」の言葉は冒頭に引用した佐藤春夫の〈「危険と遊戯を愛する者」〉を〈真の男性〉とするというニーチェの思想文脈と結びつく。[24] 見方によれば、大石もまたニーチェ文化圏の周辺に位置していたといえるだろう。ただ大石は〈陰鬱の気〉にこだわるような人間ではなかった。鷗外のいう〈sport〉

に理解を示していたかも知れない。

大石の寓意的思考は当時の革命家が直面していた問題の本質を鋭く言い当てている。また当時の思想潮流の中に置いてみたとき立派な宗教哲学であり文芸評論でもあった。大石は、〈溺れるといふ危険〉を回避して〈海に憧憬るゝのみで山の中へ隠れてしまふ〉のが採るべき道かどうか、あるいは〈危険と遊戯〉の狭間に立って生き抜くのが最良の道なのかどうかを問うている。ここで鷗外の〈「あそび」主義〉やトルストイの生き方が糾弾されているわけではないだろう。[25] その考察はジル・ドゥルーズがD・H・ロレンスの『黙示録論』（『アポカリプス論』）を論じた次のような言説と微妙に重なっている。

キリストの企ては個的なものだった。私たち一人一人の心の中に、個の心と衆の心というかたちで、対立しあう二つの部分として存在している。ところがキリストはこの私たちの「衆」の部分にはほとんど訴えかけてこない。むしろ彼はユダヤ教の僧侶とその権力とに支えられた『旧約』的、僧侶専制的な「衆」の体制を打ち破ろうとしたが、しかしそれもあくまでもそうした不純な層の下にかくされている個の心を救い出すためのものでしかなかった。皇帝（カエサル）のものは皇帝（カエサル）に返すがいい、と彼は言うだろう。彼の貴族性がそこに現われている。個の心を陶冶してゆけば、衆の心にひそんでいる怪物を追い払うことができると彼は考えていたのだった。策を誤ったというべきだろう。衆の心――私たちの外にまた内にあるカエサル、私たちの内なるまた外なる〈権力〉――にどう処して切り抜けるかは、彼は私たち一人一人の手にゆだねたのである。[26]

重い問いはまさに大石誠之助の手にもゆだねられた。「私たちの内なるまた外なる〈権力〉」は、大石に審問されるべき問題としてゆだねられたのである。

外なる〈権力〉は自分たちを捕縛し死刑宣告を下した。しかし〈衆の心にひそんでいる怪物〉＝〈内なるカエサル〉＝〈内なる権力〉もまたそうした〈権力〉構造に盲従し、同調し、永く〈逆徒〉のレッテルを貼りつけ、墓標にまで唾を吐きかけることになるとは思い及ばぬことだったろう。ここには革命家が直面するもちろんのこと、「私たちの外にまた内にあるカエサル、私たちの内なるまた外なる〈権力〉」にどう対処したらよいかという方策は示されていない。革命的急進主義運動の隘路が問われ、トルストイと鷗外のポジションを改めて問い直してみようとする。

「私たちの内なるまた外なる〈権力〉」とは、トルストイの場合〈無抵抗主義〉であり、鷗外の場合〈「あそび」主義〉である。〈無抵抗主義〉〈「あそび」主義〉それぞれが〈個の心〉の抵抗の根拠であるが、大石誠之助は裁きの権威を前にしてそれを許容する。許容することは自ら別の思想的な立場を確保していることだ。そして『マタイ伝』における優雅ともいえるイエスと教会や僧侶のヒエラルキーが支配するキリスト教とをはっきりと区別する。〈ニーチェ―ロレンス〉がイエスに認めた〈貴族性〉は〈僧侶専制的な「衆」の体制〉と激しくぶつかるが、それはまた「外なる〈権力〉」＝国家の法権力によって裁かれる大石たちのものでも

あったのである。

## 一一、差し入れられた『三田文学』

大石が鷗外の『あそび』を読んでいたことは『獄中にて聖書を読んだ感想』によって明らかだが、獄舎で刑徒たちはどのようにして文芸雑誌を手にし、またどのような感想をもったのであろうか。既述した部分と若干重複するがここでまとめておきたい。

「大逆事件」の被告全員に死刑が求刑されたのは、一九一〇（明治四三）年一二月二五日だが、その一週間前の一二月一八日、獄中の幸徳秋水は、今村力三郎、磯部四郎、花井卓蔵の三弁護士に「陳弁書」を書いて、無政府主義の正しい理解と取調べの不備を訴えた。また堺利彦には遺書ともいえる書簡を送った。その中には次のような一節がある。

○三田文学はよく気づいたね、僕はアンナ文学がすきだ、又見あたつたら送つてくれ玉へ、幽月も小説ずきだから送つて遣てほしいもんだ

ここで、『三田文学』は何年何月号で、「アンナ文学」は何を指しているかという興味ある問題が発生する。獄中からの通信文には検閲があるから、それを係官に悟られまいとして目的語を指示しない「よく気づいた」という表現には、差し入れる側の狙いとそれを受け入れる暗黙の了解が必要であったろう。これは自分たちとかかわりのある事件を扱っている文学作品でなければならない。

幽月は管野スガの雅号である。その管野スガは一九一一年一月四日に堺利彦・為子夫妻宛に「△中央公論、趣味、早稲田文学、三田文学スバルなどの新年号の御差入れを願つた手紙は届きませんでしたでせうか」（傍点引用者）と書き送っている。とすると、出て間もない雑誌の差し入れを頼んでいたわけである。

秋水の書簡が書かれたのは「陳弁書」が書かれたと同日の一二月一八日のことである。そうすると、最も近接するのは一二月一日に発行された一二月号だが、その号には、鷗外の『食堂』が掲載されている。鷗外には少なくとも一一月初旬頃までには執筆構想が固まっていたと推定される。鷗外は「日記」に脱稿日を記していないが、一二月号が市場に出回るのを一一月二〇日頃とすると、刑徒たちにとって、新聞の差し入れは禁じられていたものの、禁止解除後の雑誌については寛大であったらしい。堺らの援助によって『三田文学』一二月号が獄中に届けられ、その感想を記したものではないか。管野スガの書簡内容を勘案し、大石誠之助の『あそび』読書を考え合わせると、鷗外の小説を掲載した雑誌がかなり意図的に差し入れられた可能性が高い。

『三田文学』は一九一〇（明治四三）年五月に創刊された。「大逆事件」が発覚する一ヶ月前のことである。編輯兼発行人は荷風永井壮吉、発行所は慶応義塾内三田文学会であった。因みに荷風は一九一五年二月号まで編輯兼発行人を務めた。鷗外は創刊号に『桟橋』を発表して以来、『普請中』（六月号）『花子』（七月号）『あそび』（八月号）『フアスチエス（対話）』（九月号）『沈黙の塔』（一一月号）『食堂』（一二月号）と毎号のように作品を発表

し、それは年度が改まっても続いた。『あそび』までの作品は、『杯』『牛鍋』『電車の窓』などとともに同年一〇月一六日、短篇集『涓滴』という表題で新潮社から刊行された。〈涓滴〉は水の滴り、すなわち小さなものの比喩である。『フアスチエス』『沈黙の塔』は『身上話』とともに、一九一一（明治四四）年二月一五日、春陽堂から刊行された『烟塵』に収められた。『食堂』は『フアスチエス』『沈黙の塔』から分離されて、大正二年七月五日、籾山書店から刊行された単行本『走馬燈　分身』に収録された。二分冊の《分身》は自分のことを書いたものであり、『妄想』『カズイスチカ』『流行』『不思議な鏡』『食堂』『田楽豆腐』の六篇が収められ、自分の周辺のことを題材にした《走馬燈》には『藤蒔絵』『蛇』『心中』『鼠坂』『羽鳥千尋』『百物語』『ながし』の七篇が収められている。発表年月は一九一一（明治四四）年一月から一九一三（大正二）年一月までである。

寓意や諷刺的な色合いの濃い作品だが、『フアスチエス』『沈黙の塔』と『食堂』はそれぞれ作品集の『烟塵』と『走馬燈　分身』とに分割して収録されている。しかし「大逆事件」後の第一作である『蛇』にせよ、鷗外の影が濃い『田楽豆腐』や『不思議な鏡』にせよ、そこにも揶揄や皮肉を交えた寓意精神が発揮されている。ただポジションが微妙にずれているために判じにくいだけである。

鷗外は、今もつて、けつして戦意を喪失してはゐない。ただ、戦の方法なり、構へ方なりが変つたのである。意欲はもとの如くで、きはめて執拗である。（中略改行）……攻撃は、しだいに揶揄や皮肉をともなつて、まことにうむところなくつづけられる。（稲垣達郎「「蛙の丸呑」など――明治末年の鷗外――」[27]）

『沈黙の塔』が発表された一一月号の発行日（一一月一日）は、大逆事件の二六人の全被告の起訴が決定した五日後のことである。さらに二ヶ月前の九月一日発行の九月号には、今村恭太郎の『官憲と文芸』（『太陽』）に対する反論『フアスチエス（対話）』が掲載されている。〈侃諤の議論を寓〉したものである。

一九一〇年夏から秋にかけて、鷗外はアレゴリカルな〈思想小説〉を書いて時局に対する緊急発言を展開してきた。鷗外は西洋のように〈文学〉が尊重されず、自然主義が誤解され、社会主義やアナーキズムの初歩的な知識すらあやふやな当時の情況を憂慮し、やがて「大逆事件」が起きると狼狽する当局を諷刺する小説を書いてきたのである。

表現者としての鷗外と検閲当局との神経戦は『キタ・セクスアリス』にまでさかのぼる。

前年の八月六日、鷗外は「内務省警保局長陸軍省に来て、Vita sexualis の事を談じたりとて、石本次官新六予を戒飭す。」（「日記」）と記した通り、『キタ・セクスアリス』の発禁問題を起こし、陸軍省から戒飭の憂き目をみている。内心検閲問題に不満がくすぶっていたはずである。今回は自分のみに降りかかったわけではないが、引用した新聞報道に見られるように、「大逆事件」裁判が大詰めを迎えつつあった。予審の進行状況とフレームアップに連動した社会主義者・無政府主義者に対する苛烈な弾圧、出版物に対する取り締まりの強化をにらみつつ、鷗外は必要に応じて

『フアスチエス（対話）』『沈黙の塔』『食堂』と三様のスタイルで官憲による検閲問題に批判を加えようとした。とくに『沈黙の塔』の美しいまでに研ぎ澄まされた寓意性は、厳しい発禁と検閲を体験してきた社会主義者・無政府主義者たちが唯一真剣に反応できた文学的な表現としてあったように思われる。

私は文藝をもつて主義を説き伝道に利せねばならぬといふのではありません、文藝は元より文藝としての真価を有せねばなりませんが、私が望むのは、其真価を人生と交渉ある点に見出したいのです、人生と没交渉で画に描ける女を見るやうでは、少年は兎に角、大人を動かすに足りません、日本の文学でも鷗外先生の物などは、流石に素養力量がある上に、年も長じ人間と社会とを広く深く知つて居られるので立派なものです、私はイツも敬服して読んで居ます（一九一一・一・一〇、平出修宛秋水書簡[28]）

市ヶ谷の東京監獄から発信された手紙である。冒頭には「先頃は熱心な御弁論感激に堪えへませんでした、同志一同に代りて深く御礼申上げます」とある。そうした前提に立ったとき、堺利彦と秋水の間に起こったスパーク現象は鷗外の何によってもたらされたのだろうか。獄中の大石誠之助は遺書ともいえる獄中記で『あそび』を論じたが、その『あそび』を含めて、秋水が『食堂』にいたる鷗外の作品に強い関心を示したと推測されることは興味深い。中でも秋水が強烈なインパクトを抱いたのは『沈黙の塔』の寓意的な表現世界ではないだろうか。秋水はそれを「アンナ文学」とぼかして言ったのではないだろうか。

「鷗外日記」一一月一〇日の条に「生田弘治に沈黙の塔をZarathustraの巻首に載することを諾す。」とあるように、『沈黙の塔』は翌年の一月三日、新潮社から出版された長江訳の『ツァラトゥストラ』の序文として再録された。『沈黙の塔』を序文代わりとしたのは、長江の要望ばかりでなく、鷗外の強い意志もあったと考えられる。ここには平出を媒介者として、一一月一四日、玉水俊虡宛に〈〇無政府党事件人心ノイカニ険悪ニ赴クカト云フ〕相知レ慄然トイタシ候宗教家ハ一層努力シテ人心ヲ善キ方ニ導カザルベカラズト存候殊ニ彼匪徒ハ概皆読書家ナル由ナレバ読書家ノ為メノ宗教タル禅ノ如キハ其衝ニ当ルベキモノカト存候〉と書き送った、その外交辞令的な言葉とは裏腹に、幸徳秋水や同じ医者である大石誠之助の個性への関心を深めていったのではないだろうか。そしてそれが歴史小説創出への情念となり、やがて『大鹽平八郎』（一九一四・一『中央公論』）に筆を染めることへと繋がっていくと推測されるのである。

## 一二、〈彼方へと越えゆく人々〉の中へ

大石を始めとする刑徒たちは、ニーチェ流の〈「危険と遊戯を愛する者」〉として生き〈山の中に隠れ〉るようなことをしなかった。いや彼らは逃げるべき〈山〉などがなかった。逃げる前に〝うそから出たまこと〟という狂気じみた運命に翻弄され、司法権力の〈大浪〉に攫われて鉄の扉の中に幽閉されてしまったのである。そこからは粗暴きわまりない偽造が暴走する。それが明

治末期の過酷な現実であった。残るのは〈死〉か〈狂〉しかなかったであろう。それまでは〈適応する心持〉をもって〈何事もさう心配したものではない〉境地を飼いならすことである。

> 趣味と美学抜きの生があり得ないことは、そしてそれが、政治の次元と関わることによって、政治という観念すら変える力を持っていることは、ニーチェの正しい指摘である。（中略）喚起的なこうした使い方が最終的には間違っていないのは、政治（政党と国家の政治である。近代においては政治の概念はこの用法とその比喩的用法以外にはあり得なかった）との媒介によって、「政治学」が変わるからである。こうした意味領域の美学的流動化は、おそらくニーチェの最大の功績であろう。[29]

三島憲一は、ニーチェの〈趣味と美学〉による〈意味領域の美学的流動化〉を〈破壊的理性による美的破壊〉として高く評価する。これは大石がトルストイや鷗外に認めた〈無抵抗主義〉〈あそび」主義〉と近接した位置にあるといえる。そうした思想的立場を肯定する大石は、政治・司法権力の前に意気銷沈して自己の思想的立場を捨て去ったかのようにみえるが実はそうではないだろう。三島はニーチェのキリスト教批判である『反キリスト』を視野に入れて、一九世紀ヨーロッパにおける「再キリスト教化」という現象について、「遠くから聞こえてくる社会主義やアナーキズムの叫び声をかき消す防音装置であり、迫りくる労働者階級の運動の波を押さえる防波堤でもあった」[30]と書いている。ニーチェのキリスト教批判（ニーチェの社会主義嫌悪は有名だが、それは別として）は大石における自己の立場と相呼応したのではないだろうか。獄中で脱稿し、〈最後の文章にして而して生前の遺稿たるべき者〉（「序」）と位置づけられた『基督抹殺論』（一九一一・二、丙午出版社）の幸徳秋水は、同じ無政府共産主義思想を共有しながらそうした文脈とは異質なものとして理解しなければならないであろう。〈社会主義やアナーキズム〉の論陣を張り、バシンスキーの『道徳非認論』やクロポトキンの『法律と強権』『国家論』などの秘密出版を手がけ、権力への挑発を仕掛け続けた啓蒙思想家としての相貌や、秋水に同調し期待する革命的急進主義としての身振りは、残された彼の著述が証明している。[31]ただニーチェ流の〈趣味と美学〉の生が〈政治の次元〉と関わることによって「政治学」が変化するという可能性をどの程度抱いていたかどうかは今後の検討課題といえるだろう。

ところで、大石はかつて洗礼を受けたクリスチャンであり、周辺にはクリスチャンが多くいた。兄の余平は「明治二十年前後の我国でオーソドックスの信仰が最も強く燃えて居た時代」（『獄中にて聖書を読んだ感想』）の熱心なクリスチャンであった。一八九一（明治二四）年一〇月二八日、余平は妻ふゆとともに名古屋で濃尾大地震に遭い、英和学校のチャペルから逃げる際に滑り落ちてきた煉瓦の直撃を受けて死去し、連れられていた長男の伊作は奇跡的に難を逃れることができた。沖野岩三郎はこれを題材にして短篇『煉瓦の雨』を書いた。『煉瓦の雨』の悲劇は、予弁法的に大石誠之助の悲劇を暗示している。

兄夫妻の死については、大石の「遺書」では大きく迂回して最後に触れられている。兄夫婦が手を携えて敬虔なキリスト教徒と

して天国の都へと旅立ち、〈イサク〉一人残されたことを悲しむことなく〈麗はしい理想的な終〉と肯定し、辞世の歌四首を書き記して終っている。ここにはキリスト教への接近というよりも肉親を引き寄せ、自分もまた肉親のいる他界へと赴く覚悟が示されているかのようだ。

大石は、特に『マタイ伝』の二六章三六節におけるゲッセマネの園で祈祷するイエスの姿に共感を示し、イエスを自分たちの先駆者と見なそうとした。そして〈私の最も烈しく感ずる所は、救世主といふ強き自覚をもつた彼が、死に面して経験した悲痛なる心理状態にある〉とイエスの犠牲を考えた。また裁判および事件の本質について、〈どう考へて見ても世の中は「ヘンテコ」なものだ。七段目の生酔が言つた「うそから出たまこと」此一言が実によく人生を説明し得る〉と比喩的に表現し、「誤解に生き誤解に死ぬ」人生だったが、〈寂しき悟り〉という一言が自分の今の境地であると表明した。

しかし大石は獄中で勧められたキリスト教への帰依に同じることをしなかった。最後の欲求に身をゆだねるべく一神教の絶対者と新たな関係を結び、神への愛と幻想に抱かれて〈死〉に赴こうとはしなかった。イエスが三たび訴える「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせて下さい。わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい。」（『マタイ伝』第二六章三九節）という言葉に、大石は苦悩に満ちた人間としての姿をみようとしたのだから。そこにはもはやキリスト教は不要だった。彼は明治四〇年代のキリスト教を堕落したものと見なしていた。残されていたのは家族への想いと〈寂しき悟り〉の境地からくる澄み切った自律的自己の〈死〉のイメージだけであったのは当然であろう。

わが為めになく人ありと聞きしときとめどころなく涙こぼれぬ（Ⅱの中より）

何もの〻大なる手つかみけん五尺のをの子みぢろぎもせず

運命の手にとらはれしわれながら尚ほも生きんと悶えつゝあり

われ嘗つて恋はせざりきこひするにあまり漠たる愛なりしかな

わがむくろ煙となりてはてしなきかの大空に通ひゆくかも

一首と四首は妻宛てに詠まれたものであろうか。二首・三首の〈何もの〻大なる手〉〈運命の手〉は〝うそから出たまこと〟という〈運命〉に捕縛されそれと格闘している自己像であろう。検閲を避けた穏当な表現ながら、どす黒い国家権力の深淵を洞察している歌である。しかし大石は〈畢竟我々が自由の意志によつて為すといふ事と運命によつて為させらるといふ事と、その差別は何でせうか。その境目は何処でせうか。少くとも今の私には解りません。〉〈到底人は誤解に生き誤解に死ぬものだと自分は思ふ。〉とし、自分の卑小を痛切に感じ安心の境地にあって四五年間の生に満足していると書いた。

一九一一（明治四四）年一月二五日、『東京朝日新聞』の第五面は「●逆徒の死刑執行／▽廿四日の東京監獄／▽絞首台上の十二名」という見出しの六段記事を掲載し、その中で「堺枯川の談」

として次のように報じた。この段階で『獄中にて聖書を読んだ感想』は公表されておらず、したがって〈七段目の生酔〉を引き合いに出して書いた〝うそから出たまこと〟については誰も知るところではなかった。

▲嘘から出た　大石誠之助は又面会の際「今度の事件は真に嘘から出た真である、人生は要するにこんなものであらうと思ふ」とて自分が新宮の妻君や子供を呼ばうかと宗教に関する書籍を差入れやうかと云ひしに対し「妻子に逢つた所で仕方がない、何か来んでも宜いと云うて遣て下さい、宗教の本は読まずとも自分の方が先生である、然し先日差入れて貰つた川柳の本は面白かつた、今度は一茶の書籍を何か差入れて下さい」と語りて万事を語り切つて居る風に見えたり、米国で医師となり個人としても修養のある人なれば死に際しても悟達妙の境に入り居りしが如き風見えたり（傍線は引用者）

大石は『獄中にて聖書を読んだ感想』中の文言とほぼ同等のことを堺利彦に語ったようだ。新聞はそれを歪曲することなく伝えている。しかし処刑された大石の心の扉はおそらく開かれることなく、堺利彦らの口を通して獄外に伝えられた〝うそから出たまこと〟だけが事件の本質を示す符牒として流布していった。それも永い間にわたって。

アメリカの哲学者アルフォンソ・リンギスは『何も共有していない者たちの共同体』（野谷啓二訳、二〇〇六・二、洛北出版）の中で〈他者の苦しみを認識するのは、私の手、私の声、私の目のなかにある感受性である。この感受性は、もはや私自身の命令によって動かされるのではなく、他者の自己放棄と傷つきやすさの動きによって衝き動かされる。〉（五四頁）と述べている。佐藤春夫はそうした〈感受性〉によって〈他者の苦しみ〉に震えたのではないだろうか。リンギスならおそらく「大逆事件」の犠牲者たちについて次のように語ることだろう。

その人々はすでに死んでしまっているために、直接私たちと何も共有するものがないのに、その死が理不尽なものであったがゆえに、私たちと深く関係している。そういう関係性のありかたというものが百年前に不幸にも存在したという事実ゆえに、今まさに私たちは審判を受けているのだということを考えなければならない。他者のなかにあって、私たちに関係しているものとは、まさに彼または彼女らの他者性――私たちがその事件に向き合い、彼あるいは彼女らが残した言葉が私たちに訴えかけ、私たちに異議を申し立て続けているものにほかならないのである、と。

佐藤にとっての〈彼〉とは大石誠之助にほかならない。

**注**

(18)　『大逆事件記録第一巻　獄中手記』（一九五〇・六、実業之日本社）所収。『大石誠之助全集』第一巻（一九八二・八、弘隆社）所収。

(19)　注（18）に同じ。同書、二七八頁。

(20)　注（18）に同じ。同書、二七二～二七三頁。

(21)　一九一一年一月九日付、管野スガの平出修宛の獄中書簡に「御経営のスバル並に佐保姫御差入れ被下何より有難く」と

あり、さらに「晶子女史は鳳を名乗られ候頃より私の大すきな人にて候、紫式部よりも一葉よりも日本の女性中一番すきな人にて候」と与謝野晶子への尊敬を表明していること、新村忠雄が獄中から、中村春雨が『東京朝日新聞』（一九一〇・二・五～四・六）に発表した新社会劇『牧師の家』（たぶん新村は読んでいた可能性がある）に言及していること、桐生悠々が同じく『東京朝日新聞』に掲載したマックス・ノルドウの『べらんめい』訳が文壇に及ぼした波紋について書き送った書簡（一九一〇・一二・三、茂木一次夫妻宛）などに顕著に窺える（茂木著『大逆事件のリーダー』〈一九五六・一〇、金園社〉四六～四七頁）。なお、一九一〇年一一月一七日、桐生悠々が〈朝日文芸欄〉に発表した『べらんめえ』についての弁明記事は次の通りである。

《夫れ『危険なる洋書』に至つては、敢て僕の与り知る所ではない。東京朝日の（文芸欄ではない）文芸に対する態度の如きも僕は固より与り知らぬ。僕は匿名であるけれども、而もべらんめえと云ふ署名をして現代の文豪を罵倒したのである。言論界に不得要領は禁物だから、誤解を防ぐ為、こゝに之を断つて置く。僕の為に僕が曾て此処に厄介になつて居た東京朝日に迷惑を及ぼすことになつてはならぬから特にこゝに断つて置く（長野にて）》（傍点引用者）

「現代の文豪を罵倒」した評論はマックス・ノルドウ『現代文明の批評』を論拠にしたものである。そのことと話題となっていた悪質なキャンペーンである『危険なる洋書』は無関係だろうか。なお、この文章が書かれたとき、悠々は信濃毎日新聞社に転勤していた。朝日退社の理由は分からないが、『危険なる洋書』が悠々の執筆ではないかと社内外で問題となっていたことが推測される。悠々は自分とは無関係だと主張しているが、それなら他の朝日記者か寄稿者（原稿は誰が見て掲載を許可したか？）という別の責任問題が生じるだろうし、いずれにしても「迷惑」云々は変な弁解と思われるがどうだろうか。それから五日後の九月二二日、悠々は信濃毎日新聞への『入社の辞』を書く。そこでもマルクスの社会主義、ニーチェの個人主義はともに「現世紀の文明」を解釈する価値はないとノルドウ流の自説を枉げることはなかった。

因みに、『東京朝日新聞』に無署名で掲載された『危険なる洋書』（六）〔九月二一日〕の見出しは「▽春機発動小説と紹介者」というもので、鷗外およびその夫人を槍玉にあげた中傷記事であった。《……鷗外先生は日本に於けるヱデキントの最初の紹介者であるが、此の鷗外先生は昨年「スバル」に青年の性欲発達史めいたものを書いて発売禁止を受けさせられた而して博士の夫人は頻りと婦人生殖器に関する新作を公にされる》。同じく（七）〔九月二二日〕は、「▽宗教道徳に反抗して悪魔気取」という見出しでニーチェを批判している。《「ザラツストラ」は在来の宗教、道徳、政治を破壊して超人の出現に憧憬したるものである此の信仰失墜の悪魔の叫びは欧州は愚か遠く日本に迄及んだ（中略）此人達の見当で進めば日本の祖先崇拝など恁麼（どう）なるか考へても恐ろしいではないか》。

幸徳秋水・大石誠之助・管野スガ・新村忠雄らと『危険な

る洋書』、そこで筆誅されている鷗外や荷風（新村忠雄は高い評価を与えていた）、あるいはニーチェの翻訳者である生田長江と〈朝日文芸欄〉の助手を務めていた森田草平、長江を師とした佐藤春夫らとの交友関係、さらには『東京朝日新聞』における渋川玄耳や漱石の立場などを総合して考えると、そこには思想と自由、文学表現とジャーナリズム、批判的言説とゴシップ記事の信憑性、権力と反権力、署名と無署名（匿名）など、一九一〇年代における言説空間の重要かつ混沌とした問いの構造が浮上してくる。

(22) 『稲垣達郎学藝文集』二（一九八二・四、筑摩書房）三一一頁。

(23) 『鷗外　その紋様』（一九八四・七、小沢書店）七七七、七七八頁。

(24) L・トリリングは、シラーの美的体験としての〈遊戯〉について〈充実した人間性〉の証しとし、ワイルド、ニーチェの系譜を考えている（『〈誠実〉と〈ほんもの〉』〈野島秀勝訳、一九七六・二、筑摩書房〉一六六～一六七頁。この時代、生田長江・佐藤春夫らが関心を抱いた〈遊戯〉の〈充実した人間性〉については幅広い観点からの分析が望まれる。

(25) 中村文雄は、『大逆事件の全体像』（一九九七・六、三一書房）の中で、大石の『獄中断片』のトルストイ・鷗外評について「突発的な荒波、無実で獄中にある誠之助にとっては、トルストイ、特に鷗外のような官僚と文学者という二面性に、懐疑と羨望、不信、不満がない交ぜになっている。慊慊さを感じながらも、彼等の今後の人生に自分の人生、現在の境遇との比較をしながら関心をもっていたのではないだろうか。」（同書、二八二頁）と、私とやや見解を相違しながらも、興味深い指摘をしている。

(26) 「ニーチェと聖パウロ、ロレンスとパトモスのヨハネ」『批評と臨床』（守中高明、鈴木雅大他訳、二〇〇二・一〇、河出書房新社）八〇頁。

(27) 注（22）に同じ。三〇八～三〇九頁。

(28) 『幸徳秋水全集』第九巻（一九六九・一二、明治文献）五六〇頁。

(29) 三島憲一『ニーチェ以後』（二〇一一・三、岩波書店）同書、一六九～一七〇頁。

(30) 注（29）に同じ。同書、六頁、一五三頁。

(31) 拙稿「新村忠雄の〈遺産〉」（『初期社会主義研究』第二三号〈二〇一一・九〉）の第三節・第四節で、日本近代文学館が所蔵するクロポトキンの『国家論』の原稿、大石誠之助の秘密出版と新村忠雄の関係などについて、森長英三郎『祿亭大石誠之助』（一九七七・一〇、岩波書店）の所説に疑問を呈しながら論じている。参照されたい。

（いしざきひとし・元本学教授）